

第三十六回和辻哲郎文化賞 一般部門受賞作

## 小坂 洋右 著『アイヌの時空を旅する—奪われぬ魂』

(2023年1月30日刊 藤原書店)

小坂 洋右 こさか・ようすけ

ノンフィクション作家、元北海道新聞論説委員

1961年(昭和36年)4月21日生まれ 62歳 北海道札幌市出身

専門は、アイヌ文化、北方史

1985年、北海道大学文学部(言語学専攻課程)卒業。アイヌ民族博物館(北海道白老町<sup>しらおいちょう</sup>)などに学芸員として勤務。1989年、北海道新聞社に入社。本社社会部、東京社会部、社説担当の論説委員、編集委員などを歴任した。この間、1984年に米国アラスカ州で遺跡の考古学調査、1990年にロシア・アムール地方の民族調査などを経験。1986年以降、数回にわたって東欧・ソ連(ロシア)などを訪ね、東西冷戦と社会主義体制の終焉を体感する。本社社会部時代の1996年に北海道庁公費乱用取材班としてカラ出張、カラ接待などの実態を明るみに出し、新聞協会賞と日本ジャーナリスト会議・J C J奨励賞を受賞した。2003年には英国オックスフォード大学でジャーナリズムと生命倫理を研究。研究成果は帰国後、『破壊者のトラウマ—原爆科学者とパイロットの数奇な運命』(未来社、2005年)と『人がヒトをデザインする—遺伝子改良は許されるか』(ナカニシヤ出版、2011年)として出版された。2014年には、国内とドイツでの取材をもとに著した『<ルポ>原発はやめられる—日本とドイツその倫理と再生可能エネルギーへの道』(寿郎社)で地方出版文化功労賞奨励賞を受けた。2021年に北海道新聞社を定年退社し、北星学園大学で国際メディア論の非常勤講師を務めたあと、ノンフィクションと北海道内市町村史の執筆を手掛ける。

主著に『流亡<sup>りゅうぼう</sup>—日露に追われた北千島アイヌ』(北海道新聞社、1992年)、『アイヌを生きる 文化を継ぐ—母キナフチと娘京子の物語』(大村書店、1994年)、『日本人狩り—米ソ情報戦がスパイにした男たち』(新潮社、2000年)、『星野道夫 永遠のまなざし』(大山卓悠との共著 山と溪谷社、2006年)、『大地の哲学—アイヌ民族の精神文化に学ぶ』(未来社、2015年)、『アイヌ、日本人、その世界 *The Ainu and the Japanese: Different Ground Gives Life to Different Spirits*』(日本語・英語合冊版、藤田印刷エクセレントブックス、2019年)などがある。

### 受賞のことば

このたびは栄えある賞をいただけることになり、大変光栄に存じます。和辻哲郎文化賞といえば、冠されている和辻哲郎氏並びに選考委員諸先生の重みに加えて、歴史観を培ううえで私自身が幾多のご指導をいただいていた保阪正康先生が受賞されており、身が引き締まる思いです。

拙著『アイヌの時空を旅する—奪われぬ魂』は、北海道や樺太・千島列島に、本州以南の稲作農耕文化地域と異なる狩猟・採集・交易に基づくアイヌ民族の社会があり、言葉も自然観も地理的概念も

歴史観も異なることを、いにしへの「川の道」「海の道」や「新天地への道」を小舟や山スキーでたどりながら浮かび上がらせようと試みたものです。その過程で、日本とロシアの国家勢力拡大という大きな歴史のうねりに翻弄され、抑圧や収奪を受けつつも、それに屈しない強靱な精神力を保ち続けてきた北方民族の姿もまたイメージできました。

この受賞が、アイヌ民族のそうした歴史・文化、生き方、復権への志を国内に広く知らしめるとともに、今を生きる人々に勇気を与える契機となってくれればと願っております。ありがとうございます。

## 《選考委員評》

山内 昌之

北海道開拓使の本庁舎がサッポロにつくられた時、やや不思議なことが起きた。いまのサッポロのほぼ中心にあったコタン（アイヌ集落）をそのままにして、都市計画を立てたことだ。その責任者は佐賀藩士で開拓判官となった島義勇である。今でいえば中央省庁のナンバー3の高官が厳寒の現場に入り、米も満足になく空腹で犬を抱いて暖をとりながら飯場で寝る光景は、現代の日本人には想像もできないだろう。アイヌ民族の理解者だった松浦武四郎と親交のあった島は、新たな道都サッポロからアイヌを排除せず、工事にもアイヌ人を多く雇用した。多文化・多民族共存の精神を知る島は、残念なことに三か月で任を解かれ、やがて侍従へ移された。島は、その後も上京したコタンの長を宮城に迎え入れるなど、アイヌを分け隔てしなかった。佐賀の乱が敗れて江藤新平とともに刑死した気骨の士でもある。

著者の小坂洋右氏は、和人であっても、アイヌとの共生を心から望む人々の群像を描きながら、神々に囲まれて生きてきたアイヌや、地球上でもっとも美しかった森の過去を紹介する。江戸時代末から蝦夷地に入り込んだ内地の木材商人らが伐採で自然を破壊した惨状を語る一方で、自らカヤックやカヌーや山スキーを操りながらほとんど北海道全土を踏破したルポルタージュは野心的なものだ。カラフトのアイヌはモンゴル・元朝に抵抗したことで知られるが、やがて千島や道東のアイヌは資源収奪型国家のロシアの侵出にも苦しむ。シベリアでクロテンを取り尽したロシア人はやがてアリュート人を使って、アラスカからサンフランシスコ湾までラッコの捕獲に出かけたが、それ以上には進めなかった。理由を語るのは、カヤック探検旅行のリーダーの新谷さんである。それは、水がしみ込んでこないように目止めに使っていた海獣の油が暑さで溶けて舟が沈みはじめたからだという。目から鱗が落ちるとはこのことだ。

小坂氏は、幕末のクナシリ・メナシの戦いを「アイヌ最後の戦い」と考える見方を斥ける。それは、道内各地で民族の伝統と慣習を復活させるサケの捕獲や、2020年8月に十勝・浦幌のアイヌ協会が祖先の権利継承のためのサケ漁復活を札幌地裁に提訴するなどの抵抗と意義申し立てが今でも続いているからだ。歴史学と民俗学を踏まえながら足でアイヌ民族の足跡を探索した小坂氏の書物は、まさにアイヌ民族の時空を旅したものといえよう。和辻哲郎文化賞（一般部門）にふさわしい意欲的な作品である。

本書の主題は私の専門からずいぶん遠いように見えるけれど、読み進めていく内に実は接点が多いことに気づかされた。多いけれど、江戸期の日本文学を研究する中で、その接点を掘り下げたことはない。

近世中期以降、江戸期の文芸も演劇も視覚芸術も、その時代の認識と歴史的経過に沿って出現するのは当然で、大都市であれば蝦夷地の人々の営みの何がしかに触れ、表象として取り込んでいたこともよく知られている。アイヌを介して清朝からもたらされた蝦夷錦もその一例で、京都と江戸で珍重され、大名はもちろんのこと歌舞伎役者の松本幸四郎も蝦夷錦を象った衣装を纏う浮世絵版画までが伝わっている（歌川豊国作）。

老中松平定信が海防強化を図る 18 世紀末から和人（日本人）による北方探検をはじめ、人物を介した情報集積が盛んになり、絵画史料として注目される秦檜磨の『蝦夷島奇観』（1800 年作）、松前藩主の実弟で江戸へ出府中に詩文と絵画を身に付け、1789 年のクナシリ・メナシの戦いで和人勢に協力的だったアイヌ 10 数名を《夷酋列像》に描いた蠣崎波響などは、蝦夷地の自然とアイヌ風俗を日本の歴史的言説様式に合わせ表現することに貢献した。

本書の著者が膨大な参考文献に支えられまさに体を張って試みるのは、アイヌの時空を追い、近代期を通して物質的に多くを失ったアイヌの「奪われぬ魂」への追究である。非当事者として、実証的考察を行いながら、アイヌ民族が文化の根拠とした宇宙— 蝦夷の海と川、山と平地 —を自らの目線で捉え直し、そのすべての行程を読者に提供している。

時代と対象はもちろん、著者の位置づけも当然異なるが、明治初年、岩倉使節団の一員としてアメリカ大陸を横断した久米邦武の編纂による『米欧回覧実記』第一編「米利堅合衆国ノ部」が思い出される。他者が生きる文化を知見と体験の両面から地図の上に落とし込み、丁寧になぞろうという姿勢に共通するものを感じた。

古典文学の研究者として思い出す点はもうひとつ。東北から九州にいたるまで名所旧跡は日本中にあり、それぞれに長い記憶が刻まれている。かつてその場所に生きた人々が経験したことや心に抱いた想念が言葉で語られ、読み継がれ、その場所への移動を促す。西行も芭蕉も高浜虚子も大地に汀に憧憬をつのらせ、吟行をして、詠んだ歌が時代を超えてさらなる言葉を生みだしていった。日本列島の多様な文化を産み出し定着させる役割を担ってきた「場所」への歴史的追究を考える上でも、本書が重要な一石を投じていくことを確信した次第である。

アイヌ民族の生活や文化などの伝承に努めてきた著者が、知床半島をカヤックで一周し、石狩低地の川をカヌーで、冬の大雪山系をスキーで走破するなど、アイヌの人々の生活を追体験しつつその歴史を物語った書である。アイヌの歴史について学校で習ったことのない私は、和人の横暴に抵抗した十五世紀のコシャマインの戦い、十七世紀のシャクシャインの戦い、十八世紀のクナシリ・メナシの戦いなどを、本書で初めて知った。かつて彼等が生業から得られるラッコの毛皮や海産物を手に、日本列島の和人はもとより、オホーツク帯からアムール河下流域にまで交易圏を広げていたことを初めて知り、その力強い生命力に感嘆した。

サンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館を二十数年前に訪れた私は、その膨大なヨーロッパ絵画に驚嘆し、後進国ロシアには先進ヨーロッパによほどの文化的コンプレックスがあったのだなと思った。これらを買集めた財力は、エカテリーナ二世などが、アイヌやシベリアの先住民族を駆り立てて集めさせたラッコなどの毛皮の売買で儲けたものと本書で知り、アイヌがああエルミタージュ美術館の創設に一役かったのかと思い、なぜか感激した。またアイヌの創世神話がモンゴルのそれと似ているということも、興味深く、驚くことの多い作品だった。

カヤック、カヌー、スキーなどによる紀行の部分はスリルもあり、ところどころに挟まれる歴史的記述や文明論も興味をそそられたが、この二つがやや遊離しているように感じられたのは残念だった。にもかかわらず全篇にみなぎる著者の、和人により虐げられてきたアイヌへの深い愛情が心地よかった。